様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７００２７

研究課題名（和文）F.H.ヤコービの哲学論争と表現方法の研究

研究課題名（英文）An inquiry into the philosophical controversy and expression style of F.H.Jacobi

研究代表者
後藤　正英（GOTO, MASAHIDE）

佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号：６０４４７９８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：ヤコービは、カント以後の哲学に多大な影響を与えた人物である。ヤコービは、論争や対話を通して自らの思想を語ったが、彼の思想は、しばしば、非合理で一貫性のないものとして誤解されてきた。ヤコービは合理主義の体系を独特の方法で批判する。ヤコービの哲学は、彼のスピノザへの二重の態度からも明らかであるように、一方で合理的主義の哲学の帰結を引き受けつつ、他方で理性では決定できない領域を残している。ヤコービの理性批判の思想が、啓蒙主義、疾風怒涛、ロマン主義のいずれとも異なる独自性をもつことを明らかにするために、この研究では、『スピノザ書簡』や哲学小説『ヴォルデマール』に見られる論争や表現のスタイルに注目した。

研究成果の概要（英文）：Jacobi had a great influence on the post Kantian philosophy. Jacobi has developed his own ideas through debates and dialogues. His thought has been often misunderstood as being inconsistent and irrational. He criticizes the rational system in a peculiar way. As is evident from his dual attitude to Spinoza, Jacobi accepts the consequences of rational philosophy, whereas he leaves the area which cannot be determined by reason. In order to clarify his original position which is different from Enlightenment, the Sturm and Drang, and Romanticism, my study focused on the style of controversy and expression in his "Spinoza letters" and philosophical novels.

研究分野：思想史

キーワード：国際研究交流　ヤコービ　ヘーゲル　スピノザ　ドイツ古典哲学　メンデルスゾーン　ヘルダー　啓蒙主義

１．研究開始当初の背景

2008 年から 2009 年までの科研費（若手スタートアップ）では、メンデルスゾーンの啓蒙主義的宗教論の独自性を明らかにする研究を行った。続いて、2010 年から 2012 年までの科研費（若手 B）では、「近代宗教思想史におけるスピノザ受容史」について検討した。特に 18 世紀末には、危険思想として扱われてきたスピノザ哲学の受容史における大転換があり、ドイツ観念論では、スピノザは整合的な合理主義哲学の典型として、新たな学の形成における重要な参照軸として捉えられることになった。特にそのスピノザ受容において決定的な役割を果たしたのはヤコービの『スピノザ書簡』である。以上のように、私の研究はメンデルスゾーンからヤコービへと研究対象を広げつつあり、本研究の開始時点で、ヤコービ自身の研究に取り組む環境が整いつつあった。

２．研究の目的

ヤコービは、カント以後の哲学の形成に大きな影響を与えた人物である。ヤコービは、三つの哲学論争（汎神論論争、無神論論争、神的事物論争）に関与したが、常に論争と対話の中で思想を展開した哲学者であった。ヤコービの思想は、しばしば、非合理主義であるとか、一貫性がないものとして誤解されてきた。しかし、彼の思想には一貫した骨格がある。さらに、ヤコービは、『アルヴィル』と『ヴォルデマール』という二つの哲学小説の書き手であり、文学と哲学を分断する発想をもっていなかった。この点にも留意する必要性がある。ヤコービの思想の核心を明らかにするために、この研究では、彼の論争上のスタイルや哲学の表現方法に注目した。

３．研究の方法

本研究を行うために、ドイツの大学図書館を訪問し、文献の資料収集を行った。さらに、最終年度には、代表的なヤコービ研究者であるルール大学のザントカウレン教授を日本へ招聘することで、招待講演を開催することで、ヤコービに関心をもつ国内の研究者との学術交流の機会を設けることを試みた。招聘講演を実現するうえでは、一橋大学の加藤泰史氏と大河内大樹氏の協力を得た。

研究成果については、日本ヘーゲル学会で発表を行い、『ヘーゲル哲学研究』に投稿論文を掲載した。以上の研究を通して、ヤコービに関連する研究書出版の足掛かりを得ることができた。

４．研究成果

（１）2013 年、2014 年の成果

まず、2013 年度は、ヤコービの哲学論争におけるスタイルの分析を試みた。特に汎神論論争におけるヤコービの位置づけを明らかにするために、ヤコービの友人であったトーマス・ヴィーツェンマンに焦点を当てて考察した。ヴィーツェンマンは、『ある篤志家によって批判的に考察されたメンデルスゾーンとヤコービの哲学の結末』（以下、『結末』と略称）において、思弁的理性を批判する点で、メンデルスゾーンのコモンセンスとヤコービの信仰の間には一種の共通性があることを指摘した。『結末』は、汎神論論争の争点を明確にし、それぞれの論者に自らの立ち位置を自覚させるうえで、重要な意味をもった書物であった。実際、『方向性論文』でのカントや『スピノザ書簡に関するメンデルスゾーンの非難に抗して』でのヤコービは、ヴィーツェンマンの『結末』を参照しながら、理性と信仰に関する自らの立場を練り上げていくことになったのである。以上の内容については、佐

賀大学の研究紀要論文として公表した。

2013 年度の後半には、二つの発表を通して、ヤコービの哲学的表現方法を明らかにするために、哲学や宗教と言語の関係をめぐる当時のコンテクストについて有益な知見を得ることができた。まず、2013 年 12 月の政治哲学研究会の口頭発表では、レッシングの独特の表現方法に注目した。著名な政治哲学の研究者であるレオ・シュトラウスは、ヤコービ研究で博士論文を執筆した人物であるが、シュトラウスは、レッシングが中世以来の秘教的著述と公共的著述の双方を対比的に使用する人物であったことを指摘している。この指摘は、汎神論論争でのレッシングの真意がどこにあるのかを理解するうえで看過することができない重要な視座を形成している。

2013 年度の 3 月には、宗教哲学会において「世俗と宗教の翻訳可能性」と題する発表をおこなった。内容は、ハーバーマスをめぐる現代の議論を中心に、世俗と宗教の関係を宗教的言説の翻訳という視点から考察したものではあるが、発表の後半では、現代の議論の淵源は 18 世紀の啓蒙主義の時代にまで遡行できるものであることを指摘した。たとえば、カントは理性的言説の中立性と非宗教性を強調したが、純粋理性を言語から独立させようとする啓蒙主義的な考え方に対して、ハーマンやヘルダーは、詩的言語を重視する立場をもって反論したのであった。

発表の中では詳しく取り上げることができなかった点だが、この論争状況の中でヤコービはどのように位置付けられるだろうか。ヤコービはベルリン啓蒙主義の独断論に批判的である点では、ヘルダーやハーマンと共通する問題関心をもっていたが、詩的言語によって概念を曖昧にする点には批判的であった。ここにも、啓蒙に関するヤコービの独特の立場が現れている。

なお、この報告に基づく論文は 2014 年度に『宗教哲学研究』に掲載され、2015 年度の 3 月には宗教哲学会奨励賞を受賞した。

（２）2015 年の成果

2014 年度の 12 月に日本ヘーゲル学会で行った研究発表に基づいて、2015 年度には『ヘーゲル哲学研究』に投稿論文「ヤコービの哲学小説『ヴォルデマール』における相互承認論　―ヘーゲル『精神現象学』との対比に基づく考察－」が掲載された。

この論文は本研究の中心的成果であるので、その概要について以下に少し詳しく述べたい。以前から指摘されてきたように、『精神現象学』の良心の章の問題群（良心、美しい魂、和解など）は、ヤコービの哲学小説『ヴォルデマール』のプロットとの照応関係の中で読解できる部分が少なくない。この論文では、過去の研究を参照しつつ、相互承認論に関して、この時期のヤコービとヘーゲルの一致点と相違点について考えた。

ヤコービの哲学小説を取り上げる際には、ヤコービの特異な哲学的表現方法について考えておく必要がある。彼は、二つの哲学小説の書き手であり、その理論的著作では中心的な発想をしばしばメタフォリカルな仕方で表現した（死の跳躍、毛糸編みの靴下など）。さらに、ヤコービの著作の大半は論争的な作品として書かれているが、それは彼の哲学が本質的に対話的性格をもっていたことに起因する。ヤコービが書簡体や対話形式の哲学小説を執筆したことや、その著作に対して繰り返し改定を加えるこ

とになったことも、彼が対話の哲学者であったことと関係している。

さて、ヤコービの哲学小説（特にその初版）は、『スピノザ書簡』に先立って執筆された作品であるが、この小説には八〇年代以降の理論的著作において開花した発想がすでに内在している。『ヴォルデマール』は、主人公のヴォルデマールが、女性の友人ヘンリエッテとの間に発生した不信の危機を乗り越えて、それぞれに個別性をもった人格としての友人関係を構築する過程を描き出している。この物語の主要なテーマの一つは、ヘンリエッテという他者をヴォルデマールがどのように受け取り直したのかという点にあり、ここにはヤコービ流の相互承認論の原型を見出すことができる。

ヘーゲルはヴォルデマールを典型とするような主観性に固執する美しい魂の持ち主を批判するわけだが、ヤコービ自身も美しい魂を無条件に肯定しているわけではない。ヘーゲルとヤコービは、カントと疾風怒濤以後の人倫のあり方を模索している点では共通する問題意識を抱えているところがある。美しい魂をもつ人物をある程度相対化したうえで、その和解と再生のプロセスを描いている点が、多くの疾風怒濤期の作品と『ヴォルデマール』の相違点をなしている。特にこの傾向は『ヴォルデマール』の改定版において強調されることになった。話の大筋としては一七七九年の段階でのプロットと九〇年代の改訂版の間には共有されている部分が多いが、改訂版では、ヴォルデマールが外界を受容していく物語の後半部について大幅な加筆がおこなわれている。ヤコービは、ヴォルデマールを手放しで称賛するのでもなく、かといって冷たく批評するのでもなくて、美しい魂の持主の学びのプロセスを描こうとしているのである。ヤコービの関心は、ヴォルデマール単独にではなくて、ヴォルデマールとヘンリエッテという二人の関係性に向けられている。当時『ヴォルデマール』に向けられた多くの誤解は、作中人物のヴォルデマールと作者ヤコービを一体視するところにあったといえる。

最後に、『ヴォルデマール』におけるヤコービの相互承認論の特徴について、ヘーゲルの議論と対比しつつ、二点ほど確認しておこう。

まず、ヴォルデマールは、不信から和解へのプロセスにおいて、友人との即自的な融合状態から脱出して、友人のうちに他者の他者性を認めることを学んだものといえる。ここにあるのは、或る意味で「他において自己自身であること」というヘーゲル的な認識である。問題はここからである。ヤコービにおいても、自己は孤独な主観性への固執に尽きるわけではなくて、そこには対他関係が入りこんでいる。しかし、ヤコービの場合、汝という他者はあくまで直接性において与えられるものである。直接性に到達するためにはそれ以前の媒介は捨て去らねばならない、というのがヤコービの基本的主張であった。しかし、ヘーゲルからすると、直接性といっても、そこに到達するためのプロセスを自覚的に内包したうえでの結果である以上、ヤコービの直接性の立場も、低次の媒介の克服作用としての一種の高次の媒介であることになる。

第二に、ヘーゲルとヤコービの議論が接近するのが、道徳から宗教への移行を論じる「良心の章」であることに改めて注目す

る必要があるだろう。良心の章は、相互承認を社会的承認の問題としてよりは宗教的和解の問題として考察する文脈の中にある。後の『ヤコービ批評』での論調と併せて考えた場合、『精神現象学』以降のヘーゲルによるヤコービ再評価は主に宗教的文脈の中にあったのではないか、と推測させるものがある。以上が論文の概要である。

2015 年 10 月にはザントカウレン教授を招聘して、一橋大学にて二つの講演会を開催した。第一の講演は「ヘルダーとヤコービのスピノザ論争と、カント以後の哲学におけるヘルダー受容に対するもろもろの帰結」というヤコービとヘルダーの論争に注目したものであり、第二の講演は「ヘーゲルにおいて個人はどれほど現実的か　―スピノザ実体概念との対決」をテーマとするものであった。第一の講演会は加藤泰史氏の科研との共催で開催し、第二の講演会は大河内大樹氏の科研との共催で開催した。

第二の講演会の際には「ドイツ古典哲学の新段階」と称したシンポジウムも同時に開催した。シンポジウムでは、ヘーゲル、ヤコービ、シェリングに関して日本の研究者から研究報告が行われた。本シンポジウムのドイツ古典哲学という名称は、ヘーゲル・アルヒーフのイエシュケ教授やザントカウレン教授を中心として提唱されている近代ドイツ哲学に関する学術的呼称である。その意図は、従来のドイツ観念論研究では取り上げられることの少なかった哲学者たちも含めたうえで、この時代のドイツ哲学を哲学思考にとっての一つの範型として捉えていこうとするものである。この場合の範型とは、西洋のクラシック音楽が過去の音楽でありながらも、一つの範型としての意味をもっているのと同じような意味で解釈することができるだろう。この見取り図の中で、ヤコービの思想も、重要な哲学思考のモデルを提示した人物として扱われることになるといえる。

さて、ここでは、ヘルダーとヤコービの論争に関するザントカウレン氏の第一の講演内容について少し解説しておきたい。ヘルダーはドイツ古典哲学における重要人物の一人であり、カント以後の哲学に大きな影響を与えた人物である。しかし、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルのテクストには、ヘルダーからの影響を明示的に示す言及が少ない。これはなぜであろうか。ザントカウレン氏は、その理由を、スピノザ論争をめぐるヤコービとヘルダーの論争のうちに求めている。

ヘルダーは早い段階からヤコービとメンデルスゾーンの論争を知ることができる状況にあり、1787 年には『神』と題された対話編を出版した。ヤコービは 1789 年の『スピノザ書簡』第二版に加えた「第四付録」や「第五付録」で、ヘルダーの『神』におけるスピノザ理解を批判した。それに対してヘルダーは 1800 年の『神』改訂版でさらに応答を行っている。

ヘルダーは、空間理解や力の概念に関して、スピノザはデカルト哲学の残滓を残しているものと考えていた。しかし、ヤコービはこのような解釈は誤解に基づいていると主張する。ヤコービのこの批判を受けて、ヘルダーは『神』の改訂版で力の概念をスピノザ自身に帰する努力をしているが、ザントカウレン氏によれば、この改訂版でも、神の本質としての力を擬人的な観点から解釈する傾向性を十分には払拭できていなかったのである。

シェリングやヘーゲルはヤコービのスピノザ理解の妥当性を認めるからこそ、ヘルダーへの言及が少なくなったものと推測される。ヘルダーは二元論を一元的に統合しようとする点でカント以後の哲学者に共通

の特徴をもっているわけだが、ヤコービの観点から見た場合、その手法は折衷主義的であると批判されることになった。ヘーゲルが『ヤコービ批評』の中で述べているように、スピノザ哲学の論理的な反駁不可能性を正面から受け入れつつ、他方で全く新しい知のモデルを呼び寄せるという試みにおいて、ヘーゲルやシェリングにとっては、ヤコービの思想こそが啓発的だったのである。

以上が本研究期間中に明らかにすることができた研究成果である。スピノザに対する理解を「私のスピノザとアンチ・スピノザ」と表現した場合と同様に、ヤコービは理性批判においても二重の立場を取っている。ヤコービは、ベルリン啓蒙主義を批判したが、決して非合理主義者になったわけではなく、疾風怒涛やロマン主義とは自らを区別していたのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
１．後藤正英、「トーマス・ヴィーツェンマンと汎神論論争（１）」、佐賀大学文化教育学部研究論集、査読無、18 巻、2013 年、133－139 頁。

２．後藤正英、「山内得立のレンマの論理」、『日本の哲学』、査読無、14 巻、2013 年、77－93 頁。

３．後藤正英、「世俗と宗教の翻訳可能性」、『宗教哲学研究』、査読無、32 巻、2015 年、42-54 頁。

４．後藤正英、「ヤコービの哲学小説『ヴォルデマール』における相互承認論　―ヘーゲル『精神現象学』との対比に基づく考察―」、査読有、21 巻、2015 年、122－132 頁。

〔学会発表〕（計８件）
１．後藤正英、「シュトラウスとメンデルスゾーン　－特にシュトラウスの汎神論論争解釈をめぐって」、第 24 回政治哲学研究会、2013 年 12 月 22 日、神戸大学。

２．後藤正英、「啓蒙主義期寛容論の再考　モーゼス・メンデルスゾーンの宗教的寛容」、『現代文明の根本問題』第 11 回研究会、2014 年 1 月 12 日、立命館大学。

３．後藤正英、「世俗と宗教の翻訳可能性」、宗教哲学会、第六回学術大会、2014 年 3 月 22 日、京都大学。

４．後藤正英、「ヤコービの哲学小説における相互承認論」、日本ヘーゲル学会、2014 年 12 月 21 日、静岡大学。

５．後藤正英、「メンデルスゾーンと神学－政治問題」、一橋哲学フォーラム・第三回スピノザコネクション、2015 年 7 月 25 日、一橋大学。

６．後藤正英、「中期シェリング哲学における精神と魂　－ヘーゲルとの比較」、国際会議「ドイツ古典哲学研究の新段階」、2015 年 10 月 15 日、一橋大学。

７．ビアギート・ザントカウレン、「ヘルダーとヤコービのスピノザ論争と、カント以後の哲学におけるヘルダー受容に対するもろもろの帰結」、一橋哲学フォーラム・第四回スピノザコネクション（招待講演）、2015 年 10 月 12 日、一橋大学。

８．ビアギート・ザントカウレン、「ヘーゲルにおいて個人はどれほど現実的か　－スピノザ実体概念との対決」、国際会議「ドイツ古典哲学研究の新段階」（招待講演）、2015 年 10 月 15 日、一橋大学。

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
http://hegel.jp/

http://www.ruhr-uni-bochum.de/philosophy/forschung_kdp/index.html.de

６．研究組織
(1)研究代表者
後藤正英（GOTO　MASAHIDE）
佐賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：60447985